

北松炭田における炭鉱集落の形成と空間構成に関する事例研究

大手 2 鉱が隣接して開発した猪調地区を対象として

野口 雄太

1. はじめに

1-1. 研究の目的

かつて北部九州一帯は、数多くの炭鉱が開発され、北海道とともに日本の主要産炭地であった。北松炭田のほぼ中央に位置する佐世保市江迎町猪調地区は、昭和初期に 2 つの大手炭鉱が進出し、同炭田随一の出炭量を誇る炭鉱都市が形成された地域である。

本研究は、隣接した大手 2 社による炭鉱集落を、史資料をもとに復元することを通して、その形成過程と空間構成を明らかにすることを目的とする。

1-2. 猪調地区概要

猪調地区は南北を山に挟まれ、西流する江迎川による幅 300m 程の谷底平野上にある。元来、農村であって明治 7 年の人口は 145 戸 641 人であり、山麓に小集落が点在し、谷底には水田が広がっていた（図 1）。

猪調における鉱業は明治に始まり、明治 25 年迄に 20 坑が稼行したが、いずれも個人経営による狸掘り程度の小規模炭坑であり、廃坑と新規開坑を繰り返していた。そのなか、昭和初期に住友鉱業、日室鉱業¹⁾が相次いで進出すると、炭鉱集落が建設され、両炭鉱を繋ぐように市街地が形成された。昭和 14 年には石炭運搬のため国鉄松浦線が開通している。昭和 30 年の猪調地区の人口は 11,000 人を上回り、30 年たらずの間に猪調は炭鉱都市へと変貌していった（図 2）。

両鉱の進出は昭和初期であったが、北松炭田におけ

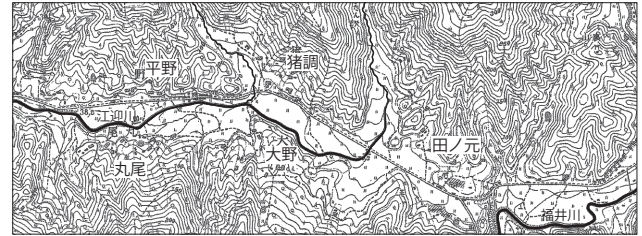


図 1 大正 13 年の猪調地区 (1/25000 地形図「江迎」に加筆)

る大手の参入は、大正 6 年の大倉財閥と地元住人による鹿町炭鉱の創設を嚆矢としており、筑豊炭田などに比べると遅い。これは、北松炭田が九州西北端に位置し、炭層が薄く機械化採炭に適さない地域であったため、明治期には大手資本の参入を見なかったが、本邦唯一の製鉄用強粘結炭の産地であることから、大正期以降の時局の推移とともに国家的な需要から注目されるようになったためである。

1-3. 研究の方法

炭鉱集落の復元に際して、地形図、航空写真とあわせて九州大学および九州工業大学が所蔵する「実習報文」²⁾を参照した。これは、採鉱技術を学ぶ学生が実際に鉱山に赴き実施した実習の結果をまとめたもので、建築学の分野では、近年、池上ら³⁾によって紹介されている。また、炭鉱集落内の施設名や位置などは、史資料・ヒアリング調査・実測調査によっている。

2. 住友鉱業潜龍炭鉱

2-1. 潜龍鉱の炭鉱集落形成

潜龍鉱の出炭成績を図 3 に示す。住友鉱業は北松炭

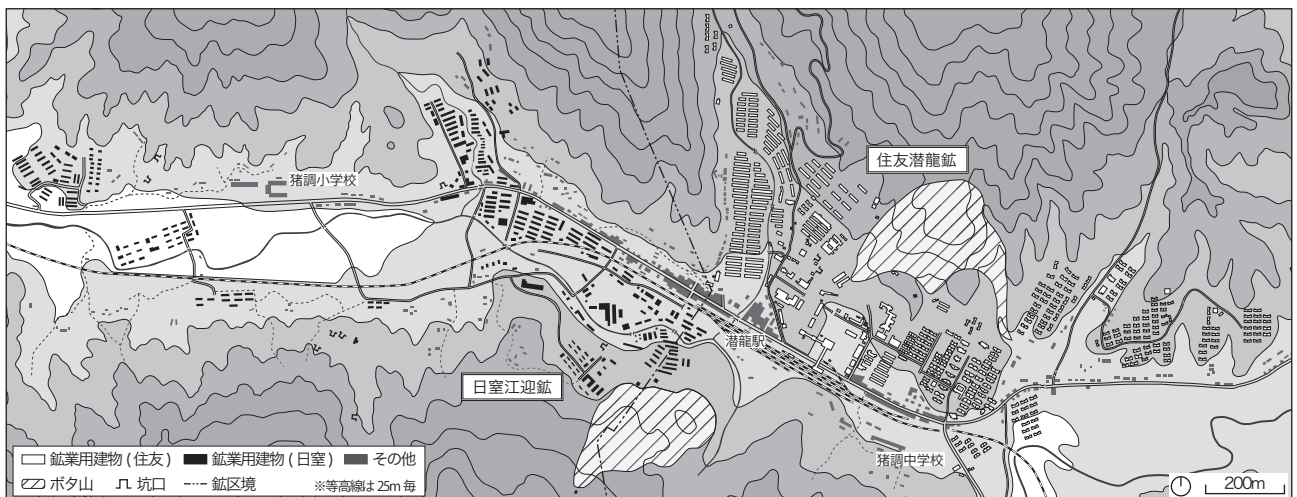


図 2 昭和 33 年頃の猪調地区 (参考文献 1, 3 より作成)

田中に大瀬鉱、芳ノ浦鉱、潜龍鉱の3鉱を経営したが、潜龍鉱は昭和18年に年産34万トン記録し、北松一の炭鉱となり、閉山の迫った昭和32年時点においても、同炭田を稼行する99炭鉱中、第5位の出炭量であった。

住友潜龍鉱は、昭和3年に個人経営の旧潜龍坑、旧吉井坑の鉱区を買収したことに始まる。昭和6年まで旧坑を経営したが、昭和10年に独自の坑口を開坑し

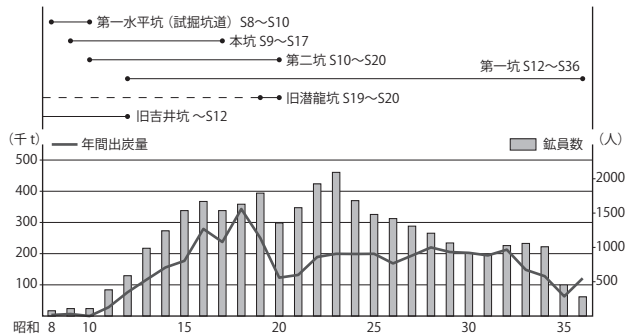


図3 潜龍鉱の稼行坑の変遷と出炭量および鉱員数の推移

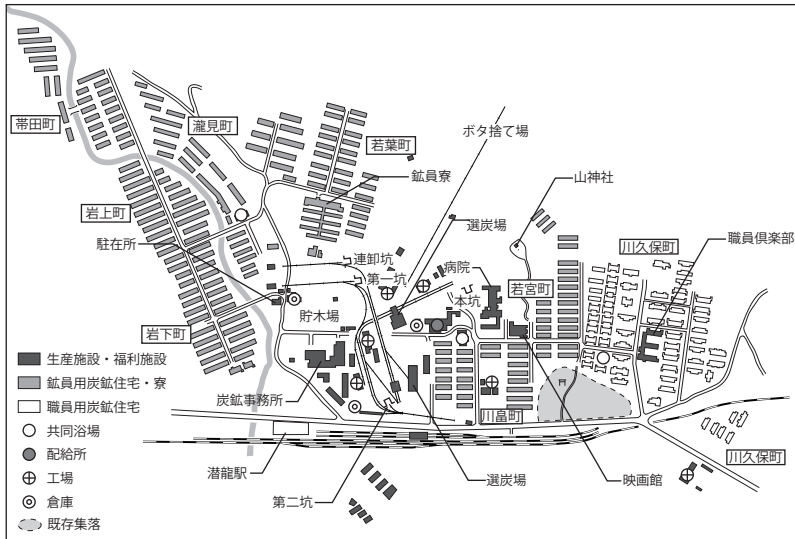


図4 昭和20年の潜龍鉱（参考文献2所収の「坑外図」より作成）

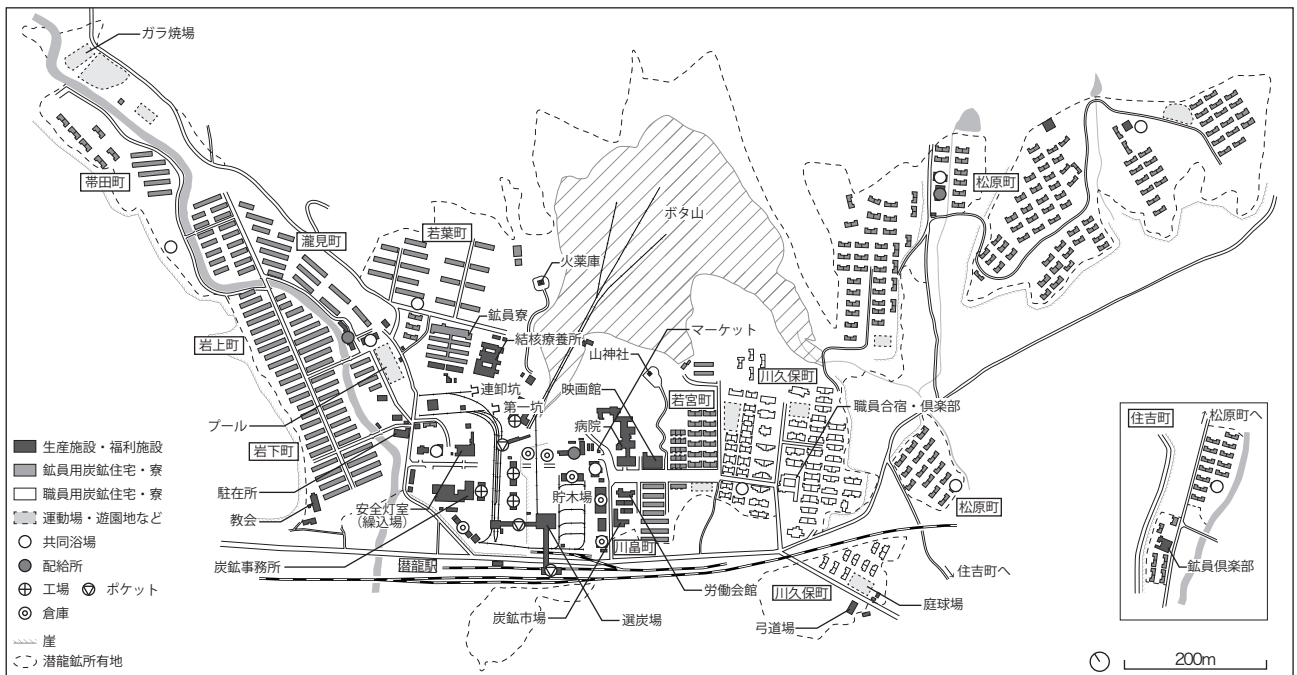


図5 昭和30年の潜龍鉱（参考文献3所収の「坑外機械配置図」より作成）

ている。炭鉱集落は、既存集落を取り込みつつ水田地を塗り替えるように形成されており、開坑時に山麓部を均して台地を造成し、その上に生産施設が配置されていた（図4）。坑口位置の選定に際して重要視されたのは、当時、計画の段階にあった松浦線との距離であり、昭和14年に鉄道が敷設されると、駅構内には専用のポケットが設けられ、石炭が選炭場からベルトコンベアによって直接運ばれた。生産施設の周辺には炭住が整然と配置されているが、住友鉱業は昭和5年に、大瀬、芳ノ浦の2鉱において納屋制度を廃止しており、その後開坑した潜龍鉱では、炭鉱の手により直接、炭住が建設されたと考えられる。

戦後、潜龍鉱では、炭層が薄く採炭が困難となっていた第二坑を廃止し、第一坑に注力して坑内外の合理化を図っている（図5）。坑口を1つに絞る、生産施設

の再配置を行って、巻揚から積込までが一本化されており、その間の石炭運搬に炭車を効率よく利用できるよう軌道を複々線化している。また、鉄道を直接鉱内に引き込み、線路脇に貯木場を移し、軌道で各工場や第一坑と連絡することで、資材運搬にかかる労力を減らしている。居住施設としては、新たに土地買収を行い、鉱員用二戸一からなる松原町、住吉町を建設している。また、若宮町では、鉱員用長屋が二戸一へと建て替えられている。

2-2. 炭鉱集落の内と外

炭鉱集落内の配置に着目すると、斜面地

に建設された岩下町周辺の5地区は、各地区から伸びる集落内道路が一点で交わり、その角に駐在所が設けられるなど外部から隔離されており、戦後に建設された2地区も、既存の炭鉱集落と連続して建設されているものの、集落外とは崖によって分断されていた。一方で、既存集落と隣接した川久保町周辺の3地区は国道沿いの低平地に建設され、川島町には、戦後、民間商店と連続して炭鉱市場が開設され、周辺住民にも開放された病院や映画館前の道路を拡幅し行商人の露天市に供するなど、市街地と連続した空間作りが行われたことが伺える。しかし、炭鉱集落全体から見ると開放された地区は限定的であったと言える。

3. 日室鉱業江迎炭鉱

3-1. 江迎鉱の炭鉱集落形成

江迎鉱の出炭成績を図6に示す。日室鉱業は国内および朝鮮半島で金属鉱山開発を行った新興財閥企業であるが、江迎鉱は同社にとって唯一の石炭鉱山であり、主力事業所であった。北松炭田中では、昭和32年において第3位の出炭量を誇った。

日室江迎鉱は、明治43年に松島炭鉱関係者の手によって合併された未開発鉱区を買い受けて昭和10年に開坑している。その炭鉱集落は、一坑周辺の生産施設と鉱員社宅が並ぶ東部と、居住施設のみから構成される西部からなる(図7)。東部では、谷間に突き出した斜面の中腹に一坑を設け、炭住は川の合流地点より上流側に建設され、西部との間には水田が広がっている。二坑坑口周辺に集落建設は見られず、一坑と連絡する軌道によって結ばれた。日室鉱業は専用の積出港を有し、石炭運搬のため、江迎鉱との間8kmを繋ぐ索道を敷設している。この索道の端部に選炭場が置かれ、一坑、二坑から産出される石炭が運び込まれた。また、昭和20年に隣接する日満鉱業江里鉱を買収、三坑と改称し経営にあたった。

戦後、昭和25年になると、坑道の合理化事業が行われた。3坑は同一炭層を稼行しており、地下の水平坑道で一坑と三坑を連

結する計画が立案された。この際、三坑の脇に地下坑道へ直接斜坑を繋ぐ新三坑を新たに開坑している。即ち、1つの採炭区域が独立した3つの坑口を持つこととなり、坑口の使い分けが可能となった。これにより、一坑は出炭専用坑、三坑、新三坑は資材搬入と鉱員の入手専用坑となり、用途に合わせて坑外施設が再編されている(図8)。三坑周辺からは生産施設が排され、居住施設を拡充している。一方で、一坑周辺では生産施設が増補新築されている。また、一坑上部の山林を拓いて鉱員寮を備えた桜町が、二坑周辺の斜面に丸尾社宅が新たに建設されている。他の地区は、それぞれ炭住を新築して拡大している。加えて、その周辺や国道沿いに、勤続年数の長い鉱員や職員が自ら土地を購入し、住戸を建設していた。

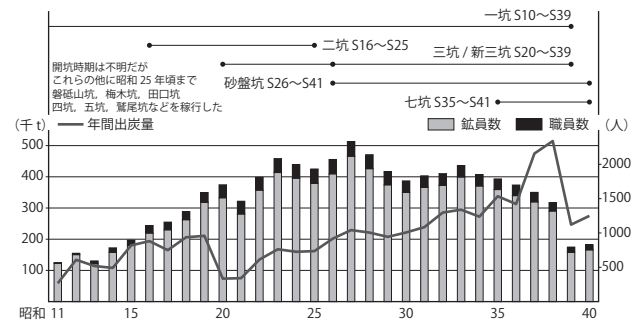


図6 江迎鉱の稼行坑の変遷と出炭量および鉱員数の推移

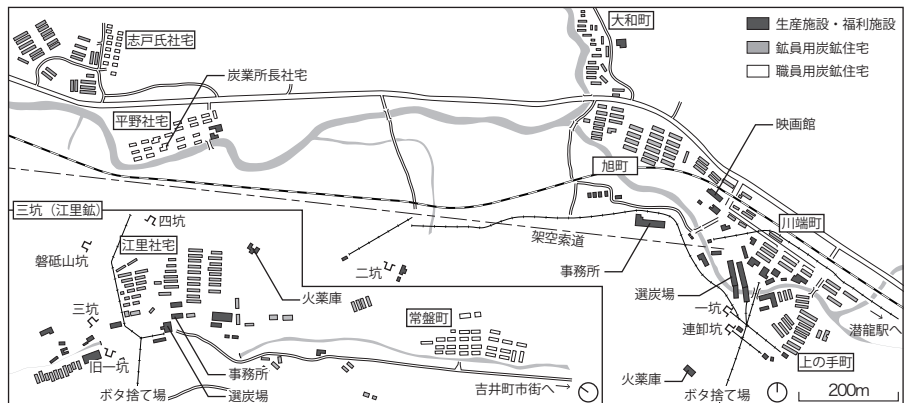


図7 昭和22年の江迎鉱(参考文献4所収の「江迎鉱業所坑外図」より作成)

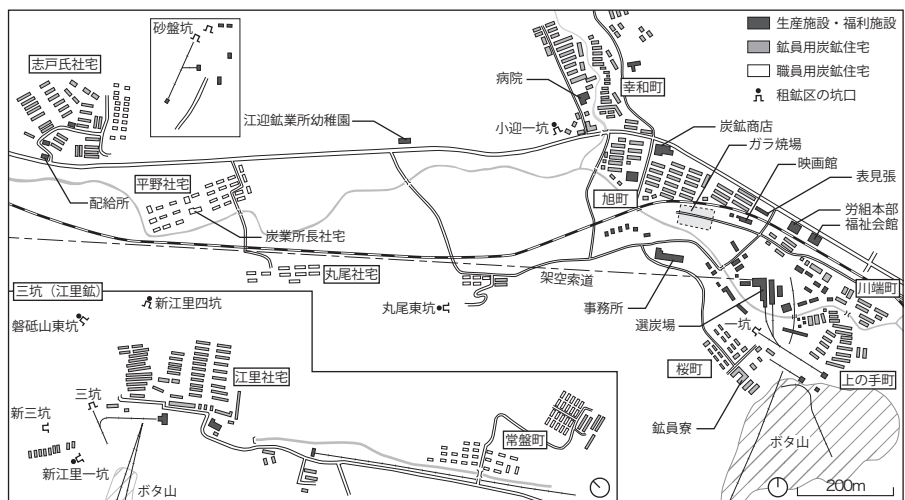


図8 昭和33年の江迎鉱(参考文献1より作成、建物の機能はヒアリングにより補った)

江迎鉱は昭和26年に上部層を採炭する砂盤坑を開坑しているが、その坑口周辺には生産施設のみが配置された。これはのちに開坑する七坑も同様で、石炭はトラックにより運搬され、鉱員たちは離れた炭住と坑口間をバスで送迎された。

3-2. 炭鉱集落と市街地の接点

江迎鉱の炭鉱集落は国道沿いに建設されたが、炭鉱商店や共同浴場などの運営は、猪調で商店を営む地区住民に任せていた。そうした炭鉱の施設を中心に個人商店が集積し、市街地が連続して形成された。

また、昭和25年の鉱業法制定により租鉱権が創設されると、江迎鉱の鉱区内に累計23の租鉱区が設定され、上部層の採炭を中小炭鉱が担うようになった。はじめは、明治期の旧坑や江迎鉱の廃坑における残炭掘が中心で、半年や1年程で再び廃坑するものが多かったが、昭和32年頃になると、未開発鉱区に開坑するものへと変わっていった。租鉱権者を見ると、江迎鉱の元幹部職員や開坑以来の下請企業であり、租鉱区から産出される石炭は江迎鉱に納入する契約が交わされ、江迎鉱の人員を雇用し、江迎鉱の炭住を借りて住ませるなど、租鉱区の開発は、江迎鉱の新規坑口開発としての側面を帯びていたと考えられる。

ここで租鉱区において9坑の経営を行ったN家を取り上げる。N家の家長は、松島炭鉱において大納屋頭を務めた人物であったが、自身が開坑から請け負った松島四坑が昭和9年に水没し廃坑となったため離職、江迎鉱の開坑とともに猪調へと転居している。江迎鉱の鉱区は、松島炭鉱の手で試掘を実施したのちに、日室鉱業が譲り受けており、開坑当初の江迎鉱には、所長をはじめとして、松島四坑をおりた職員や鉱員が多く就職していた。N家の家長は直接雇用されてはいないものの、一坑の開坑から着炭までの技術指導と土地買収に協力していた。また、N家は江迎鉱の正面入口である表見張の向かいに居を構え（図9）、江迎鉱の石炭運搬やガラ製造販売などを担う下請企業3社を営み、猪調地区を中心に130名前後の従業員を雇用したが、役員として日室鉱業の元取締役らを迎えるなど、江迎鉱と密接な関係を築いていた。一方で、従業員を町議会議員に当選させ町政に意見し、猪調地区の商店や工場に出資して経営に参加し、小学校や部落会に金銭援助を行うなど、市街地側に対しても影響力をもっていた。こうした関係から、N家は、江迎鉱関係者や政治家、地区住民など、所属の異なる人々が寄合う場として機能し、炭鉱と市街地を結んでいた（図10）。

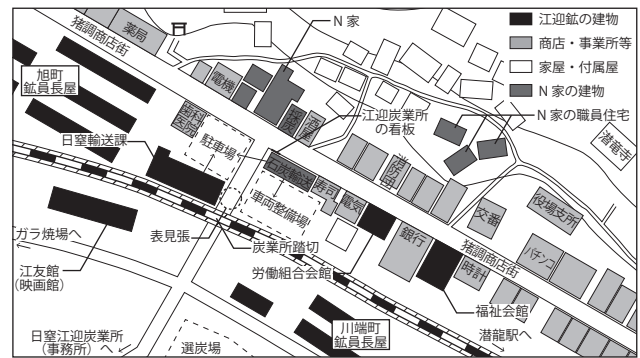


図9 江迎鉱正面周辺の復元図（種別はヒアリング等による）



【左】：N家の初孫の初節句祝いの様子。親類やN家の従業員に加え、江迎鉱の課長級職員らや町議、その家族らがN家の座敷に列席し、芸妓の三味線の音と手拍子に合わせて踊りを披露するなど酒宴を楽しんだ。

【右】：正月の挨拶にN家を訪れた人同士が玄関先で話す様子。左の人物は地元の個人商店主、右は江迎鉱の採炭課長。この後、右の人物は家から出てくる先客（N家従業員）と肩を組んで潜龍駅の方へと繰り出した。

図10 N家周辺の様子（N家所蔵の8mm映像より）

江迎鉱は石炭生産にこうした下請企業を参加させ、施設の運営を地区住民に任せるなど、市街地側と協業して集落建設と運営を行っていたと言える。

4. まとめ

以上、隣接した大手2鉱による炭鉱集落を見てきた。猪調地区は狭隘な山間部にあり、両鉱とも鉄道の敷設される緩勾配の低平地の近くに生産施設を配置したため、農地を塗り替えるように炭鉱集落を形成していたが、両鉱は対照的な空間構成を見せた。すなわち、潜龍鉱が生産・居住が連続した一体の集落を建設したのに対し、江迎鉱は生産と居住を独立して計画し、分散した集落を建設していた。両鉱は、戦後の増産策として、坑口の集約と増加という異なる方針を取っており、また、江迎鉱は鉱外の人員を積極的に活用したが、これが炭鉱集落と市街地を連続させた要因となっており、経営方針の差が集落形態の違いに表れていると言える。

<註>

- 住友鉱業および日室鉱業は財閥企業であり、新会社設立とそれに伴う業務移管や、関連会社との合併により、炭鉱業にあたる会社の名称変更が度々見られるが、本稿では一般的な名称としてこの2つを用いた。
 - 参考文献2-4を含め、潜龍鉱については12冊、江迎鉱については2冊の実習報文が存在する。
 - 参考文献9参照
- <参考文献>
- 沢田秀徳『日本炭田図Ⅱ北松炭田地質図』地質調査所、1958
 - 山川昇『潜龍一坑実習報告』九州大学所蔵、1948
 - 麻上幸徳『潜龍鉱業所実習報告』九州大学所蔵、1957
 - 園田忠彦『実習報告日室江迎鉱業所概要』九州工業大学所蔵、1947
 - 須田順『江迎炭鉱深部採炭計画』『九州鉱山学会誌』18(12)、pp.17-26
 - 前川雅夫編『炭坑誌 長崎県石炭史年表』葦書房1990
 - 江迎町教育委員会編『江迎町郷土誌』1968
 - 通商産業大臣官房調査統計部『全国炭鉱要覧』1958
 - 池上重康ほか「日本近代炭鉱系企業社宅街に関する基礎的研究 - 鉱山系高等教育機関の実習報文を基礎資料に -」『住宅総合研究財団研究論文集』33、pp.229-240